
お嫁さまの条件

山内 詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お嫁さまの条件

【Nコード】

N0031Z

【作者名】

山内 詠

【あらすじ】

社長からの突然の呼び出しで、お願いされたのはなんと有名俳優とのお見合いだった。三十路地味OL幸子のお見合いから始まる恋物語。

0 三十路女の眩き

私、坂本幸子、サチコと書いてユキコはついこの間、30歳になった。

29歳と30歳、そこには深くて大きい河が流れていると思っていたけれど、なってみればなんてことはない。そんな境目はひょいとひと跨ぎすれば通れる小川のせせらぎのようなものだった。

30歳って、子供の頃はもっともっと大人だと思っていた。

当たり前みたいに結婚して、子供がいて、もしくはバリバリと仕事をしていて、自立していて。

ぼんやりと思い描いた未来予想図通りに暮らしていると思っていた。でも実際なってみれば、何にも考えていなかったような頃から大して成長していない自分がいる。

仕事はそこそこ、結婚どころか恋人もいない、実家でお気楽なパラサイト生活。

学生の頃はどうかあがいても同じ場所に居続けることなんてできなかった。

6年、3年、そして4年と期限がくれば出ていかなきゃいけないから、否応なしに変わっていく自分を受け入れなくてはならなくて。

受け入れなければ、家に引きこもるしかない。

そんな風に何もかもを投げ出すほど怖がりでも絶望してもいないから進むしかないんだ。

ただ社会人になってルーチンワークに埋もれていると、成長なんて変化なんて感じられない。

毎日、毎年、同じことの繰り返し。経験をただ積み上げていくだけ。

去年のことも、一昨年のことも、一緒くたにして流れていく。そうして結局何一つ、変わってなんかいないのだろう。

だから年齢なんかで区切れるものか。

でもこれは通った後だから、言えることなのかもしれないと思う。世紀末に世界が滅びなかった時に似ている。あんなに大騒ぎしていたのに、何にも起こらなかった時に。

半信半疑なややこしい心理。ある意味開き直りに近いのかも。

だって放っておいても悩むお年頃よ、20代なんて。

恋愛から遠ざかれば結婚からはますます遠ざかる。素敵な人はどんどん綺麗な女の子と片付いていく。

さらに新卒で入社した会社は居心地だけは悪くないけれどキャリアなんて夢のまた夢みたいな所だったから、余計に迷いは深かったかもしれない。

……なーんてね。

正社員として採用されただけでも十分だってわかってます。

愚痴を言える程学生の時努力したか？ と問われれば答えは否だ。

でも「この会社^{はしや}じゃない、どこか」なんて、私だけじゃなく、社会人という立場に慣れた人ならみんな考えることだと思う。

天職に巡り合えたり夢を仕事にした人じゃなければ、隣の芝生は、とーっても青く見えるものなのだから。

転職市場に出回るのなら、早いうち。

なんて考えながら耳触りのいい資格をいくつか取得してみたりなんてしているうちに、海の向こうの証券会社の倒産からあつという間に100年に一度の大不況。

就職したての頃も不況だったはずなのに、景気の底ってどこにあるのかって澄ました顔してテレビの中で解説している経済学者を問い

詰めたくなる。

若いうちの苦労は買ってでもしろ、なんて言葉の重みを実感するのは、若くなくなってからなんだよね。

変化がないことが不安で、同じことに怯えて、立場や環境が変われば何かが解決してくれると信じてしまう。

弱くて、不安定な10代の頃と何が違うの？

何をもって、成長と言うの？

迷って悩んでうだうだして、そうこうしているうちに、30歳。

あっという間だ。

変わりたいとは思っても、変われない、変わらない。

そんなどこにでもいる三十路女だった私の人生は、30歳になったことでなぜか回り始める。

ハリケーンカトリナも真っ青な、大嵐の来襲だった。

1 突然の呼び出し

始まりは、一本の電話だった。

「坂本さん、内線2番。総務課長から」

「あ、はい」

総務？ 何かあったっけと思いながらも伝票を確認していた手を止めて、電話を受ける。

「もしもし、ご苦勞様です、坂本です」

『ご苦勞様です、総務高野です。今日業務は立てこんでいますか？』

ちらつと脇に積まれた書類を見る。今日は別に急ぎの仕事は無いし、順調に行けば定時には帰ることができるだろう。

真っ先に仕事の具合を尋ねるということは、何か時間のかかる手続きでもあるのだろうか。

「いえ今はそれほど。何かありました？」

総務課になんて、年末や期末の手続き以外に用事など思いつかない。

『いや少しお話したいことがありますて、14時に第三会議室まで来て頂けないでしょうか？』

1時間程度で終わる予定なのですが』

「あ、はい。大丈夫です」

『ありがとうございます。では14時によろしくお願いします』

「わかりました。よろしく願いします」

受話器を置いた後、しばし考える。

第三会議室は7、8人も入れればいっぱいの少人数用のスペースだ。そこに総務課長からの呼び出し。

……これってもしかして、人事異動？

ウチの会社そう大きくないので、総務課が人事関係の業務も請け負っている。でも今のところ他の部署で欠員が出たという話は聞かないし、直属の上司からも何にも言われていない。

首をひねりながらも1時間程席を外す旨周囲に伝え、第三会議室へと向かうとそこには総務課長以外の人もいた。

「じゃ、社長！」

「はいどうも、ご苦勞様です」

「ご、ご苦勞様です」

なんとウチの会社の社長、だった。

大した会社じゃないけれど、それでも雇い主には変わりない。普段仕事じゃほとんど顔を合わさないし。わざわざ総務課長を通じて社長からの呼び出しっていったい何？

もしかして私、何か悪いことした？

「まあどうぞ、話は座ってから」

頭を良くない想像が駆け巡ってかちんこちに固まってしまった私は、促されてなんとかよろよと椅子に腰かける。

すかさず、総務課長からプラスチックカップに入ったコーヒーが差し出された。

心を落ち着けようとミルクだけ注いで、マドラーでぐるぐると念入りにかき混ぜ一口飲む。うん、いつものコーヒーだ。

社長も同じようにコーヒーに口を付けている。

よし、驚きは治まった。さあ、クビが異動か、なるようになりやがれ！

「そ、それで、お話と言うのは」

社長がカップをテーブルに置くタイミングを見計らって、こちらから口火を切った。

「ああ、うん、まず仕事の話ではないから。だからリラックスして聞いて下さいな」

「は、はい」

「つか社長と仕事の話以外の何を話すよ？ まあでも一応かちこちだった身体からは幾分力が抜けてくれた。」

「えーとね、それと、これセクハラとかそういうのではないから。だからほら、高野君にも同席してもらっているのだけれど」

「はあ」

最初にセクハラの確認って、ますます何なの？

「坂本さん、結婚の予定はある？」

「はあ？」

結婚、と言われてやっと、セクハラ云々の確認理由を理解する。

以前年配の社員が彼氏はいるのか、なんて気にする人は気にすることとを派遣の女の子に言ってしまったことがあった。その子がすぐさまセクハラだなんだとか喚きたてて、結構揉めたんだよね。

ウチの会社は社内恋愛に寛容なせいか、そういう社内ゴシップが皆大好きだ。

さらにいい意味でも悪い意味でも昔堅気で、絵にかいたようなオジサンたちのちよつとしたからかいなんてものは、もう30歳の大台にのつちやった私だけじゃなく女性社員全員が慣れたもの。

だから皆騒ぐほどのことでもないとは思ったけど、その派遣の女の子はどうしても許せなかったらしく、散々に喚き立て、味方がいないとわかるとすぐさま辞めてしまった。

派遣会社の営業さんが菓子折りもって謝罪に来てたはず。

やたら豪勢な菓子だったから全く関係のなかったウチの部署までお裾分けが回ってきて、それで印象に残っていたのだ。

「いや、ありませんが」

「付き合っている人は、いるのかな。正直にお願い」

「い、いません」

何この質問タイム。

「結婚したいなっていう気持ちはある？」

「一応はあります。ですが、まず相手がいないと始まりませんので」
ここ数年、彼氏どころかデートもない。度々誘われて合コンは行くけど……こなして終わりだ。楽しく飲んではい終了って感じ。
そんな私の寂しい返事を聞いた社長は、なんだか嬉しそうに声を弾ませて言った。

「じゃあ坂本さん、お見合いしない？」

1 突然の呼び出し（後書き）

高野課長はムーンライトノベルズ作品に登場しております。

目上の方に「ご苦労さま」の挨拶することは失礼にあたりますが、この会社では誰にでも「ご苦労さま」と挨拶します。

2 思いがけない依頼

「はあ?!」

社長相手とは思えないような声を出してしまった。いかんいかん。

「すつごくいい相手なんだよ! 是非! お願い!」

しかし社長は私の間拔けな返答など全く気にせずこの通り! とばかりに両手を胸の前で合わせて頭まで下げて見せる。
なんなんだ、一体?

「いや急に言われても……わたしよりもっといい条件の子、いると思います。」

例えば、営業一課の鈴木さんと佐伯さんとか若くて美人の方が……」

自分で言うのもなんだけど、私はもてない。

一重の目はどんなにメイクを頑張っても大きくは見えないし、面長でさらに167cmと背も大きいせいから昔から老けて見られる。

16歳の時、ノーマイクで出かけた駅ビルでクレジットカードの勧誘を「学生だから」と断ったら「大学生でも大丈夫!」と太鼓判を押されたくらいだ。

最近ようやく実年齢と外見が一致してきたように思う。まあ要するに、ずっと三十路顔。

なんとか頑張つて男性とお付き合いまでこぎつけても全く長続きしない。

つままない、重い、ブス……一通り男の人から言われてショックなことは言われている。

そんな私に比べて営業一課の事務二人は他社でも評判の、我が社のツートップと言ってもいい存在だ。

社長がお願いなんて言うくらいに相手だから、取引先から頼まれたとか、そういう義理とか絡んでいるものだろうし、会社の信頼に関わるのなら綺麗どころにお願いした方がいいと思う。

鈴木さんはかつちり系の服装が良く似合うすっきりとした和風美人で、佐伯さんは密かに『ハンター』なんて呼ばれているグラマー美人だ。恋多き人で社内の若い男は佐伯さんに一度はふらつといったことがあるだろう。

社内情報網によると、確か二人とも今のところフリーのはずだ。

「ああ、鈴木さんは今度結婚するの」

「えっそうなんですか!」

一課の鈴木さんがガード固いと有名だったのは彼氏がいたからなのか!。

前に突然右手薬指に指輪をしてきた時に相手が出来たのでは? っ
て噂になっていたけれど、本人が否定してたからうやむやになって
いたんだよね。やっぱりかーなんて勝手に勝手に納得していたら社長が含
み笑いをしながら暴露してくれた。

「高野さんになるのよー」

「高野さんって……もしかして!」

社長はにやにや笑いながら隣に立つ人を見やる。総務課長の名字は
高野だ。

「上手くやったよねえ、高野君。若い子捕まえて」

「はあ、まあ」

眼鏡のずれを直すとみせかけて顔を隠した総務課長の頬は先ほどと比べるとちよつと赤い。

うつわあ、総務課長と営業のマドンナ結婚ですか！

これは久しぶりのビックカップルじゃないの。いいネタゲット！

「じゃあ佐伯さんは……」

ここだけの話しだけどね、と社長が片手で口元を覆いながら声を潜めて身を乗り出してきたので、ついつい釣られて私も身を乗り出した。

「二課の三浦君と付き合ってるんだって」

「ええええええ！」

「坂本さん、いい反応するねえ」

社長が嬉しそうに言う。ああ、誰かに言いたくてたまらなかったんだろうなあ。いやその気持ちわかりますよ。

あの二人、仲がいいって話は聞いたことあったけど、付き合ってたつてのは未確認情報すぎる！

うわ、今日の三時が楽しみだ！
おやつのじかん

「……社長、話が脱線し過ぎでは？」

声に含まれる棘を隠さずに、総務課長が社長を咎める。

……社長が好きだから、社員もこつわたしいいう恋話好きなんだね、きつと。

「あ、まあ、そんな感じでね、結構皆さん相手がいるみたいなんだよ」

こほん、と咳払いをして、居住まいを正した社長が話を続ける。

「彼氏とかいる子に無理やりおススメするのはねえ。」

それこそセクハラじゃないかなと思って。だから先に確認させてもらった訳です」

「でも、他にも独身はいると思いますが」

「それがね……」

社長がちらりと総務課長の方を見ると、総務課長が苦笑いしながら説明してくれる。

も、もしか私以外全員に相手がいるってか！？

それ、いくら私がもてない女だからって、地味にシヨックなんですけど……。

「我が社に在籍している女性社員の内、独身なのは坂本さんを含めて12名おります」

「はい……」

「安心していいですよ、坂本さん。その全員にお相手がいるわけではないようですから」

わ、私の頭の中、お見通しですか総務課長！

「ただ今回のお見合いにつきましては、少々事情があらいのようで」

「事情、といいますと」

ここで社長が言いたくなさそうに斜め上を見る。随分都合が悪そうだ。

「相手がね、私の後輩なんだ。」

社長は確か44歳のはず。

今年の新年会の挨拶でぞろ目でめでたいけど4だから不吉かもしれないなんて言ってたから覚えている。ということは社長の後輩って、若く見積もっても40前後？

その年齢で見合いって。……いや逆に見合いしか手立てはないか。

「……社長、失礼ですが、先ほどすつごくいい相手っておっしゃいませんでしたか？」

「年齢以外は完璧と言ってもいい相手なんだよ」

年齢以外完璧！？　ますます怪しい。

「じゃあ総務の村瀬さんはいかがですか？　年齢近いですし」

村瀬さんは40代で×イチだけど子供はいない。

「うーん、大きな声では言えないけれど、相手が初婚の方を希望しててね」

おいおい、40代で贅沢な話だな。

「どうだろう。受けてもらえないかね」

社長がまるで縋るように私を見る。

なんでこんなに必死なんだろう。よっぽどこのお見合いを断れない理由があるのだろうか。

「……会っただけなら。お断りするか、お付き合いするかは私が決めて構わないでしょうか？」

社長の眼力に根負けして、承諾してしまった。

くそう、普段はメタボなお腹を揺らしていてもやはりトップに立っているだけあるぜ。

まあ仕事だと思えばどんな男が来てもまあなんとかあしらえるだろう。伊達に年は食ってませんので。

「もちろんだよ！　ありがとう！」

感激を押えきれないとばかりに、社長が右手を私に向かって勢いよく差し出してきたので、慌てて握り返すとぶんぶんと子供のように振り回される。テ、テンション高いなあ。

「大丈夫、会ったら絶対に断ろうなんて思わないから！」

社長の自信満々なその言葉に、私は困惑しつつもどんなに完璧な男が来るのか逆に少しだけ楽しみになってしまったのだった。少しだけ、ね。

「詳しいことは高野君からメールしてもらおうから！」

じゃ、あとよろしく！ とご機嫌で社長は去っていく社長を会議室の前で見送る。

コーヒークップを片づけた後、エレベーターを待っていると、不意に総務課長が口を開いた。

「……先ほど聞いた話は、内密にしておいてくださいね」

ちらりと横にいる総務課長の顔を見れば、口元には笑みが浮かんでいるけれど、目は全然笑っていない。

「……了解しました」

やっぱり、駄目でしたか。せつかくのスクープ情報だったのに……。

2 思いがけない依頼（後書き）

鈴木さん、佐伯さん、三浦さんはムーンライトノベルズ作品に登場しております。

特に佐伯さんと三浦さんのお話は別に番外編として書く予定。

村瀬さんはサイト限定公開作品「エンドオブザワールド」にちらっと登場しております。

3 待ち人は

社長という職業は、フットワークが軽くないと出来ないのだろうか。何しろあの面談？ から3日後にはもうお見合いの詳細が示された社内メールが届いた。

日時と場所の詳細を確認しながら、思うことはまあ、ひとつだけ。

一体どんな男^{ひと}なんだろう。

社長の後輩、ということしか聞いていないから、どうやっても豊かなお腹の人しか想像できない。

後輩ってことは学生時代の知り合いだろう。大学？ それとも高校？ まあいい、ただ会うだけだ。

場所として指定されたのは、都内のホテルのラウンジ。2週間後の日曜日、時間はなんだか中途半端な16時。双方付添人無しだから、気兼ねは無い。

いつそのことかっぱーんと鹿威しが風雅な音を立てるお庭があるような料亭だったらよかったのにな。

いかにもお見合いって感じがするじゃない？ 美味しいご飯も食べられそうだし。

でもそんなことしたら私は振袖とか着なきゃいかんのか。

三十路で振袖……。

成人式の着物なら一応持っているけれど、さすがにもう無理があるわな。

私の今日の格好は無難にグレンチェックのAラインワンピースにオフホワイトのジャケット姿。

どうせ私が断らなくても相手から断ってくるだろう。

だけど礼儀としてトイレで最終チェック。

磨かれた鏡の中に映る私は、相も変わらず地味で若くない女だ。

足音を吸い込むようなカーペットを踏みしめてラウンジへと向かうと、背筋を伸ばしたスタッフが出迎えてくれる。

「いらっしやいませ、お一人様でいらっしやいますか？」

ええ、普段はおひとりさまなんですけどね。

「いえ、待ち合わせで。小田桐で予約が入っているはずですが」

小田桐は社長の名字だ。

結局相手については全く教えてもらえてない。

年齢以外完璧というのだから、お金はあるとかそういう人なのかなと予想したけれど、どうだろう。

「かしこまりました、どうぞこちらへ」

ここのラウンジにはアフタヌーンティーを楽しみに以前来たことがある。

チョコのスクーンに添えられていたラズベリージャムが合っていてすごく美味しかったなあ。今日も頼んじゃおうかな。お見合いで、三段のティースタンドって有りかしら？

案内されたのは、観葉植物と照明で他の席とは仕切られた半個室のような席だった。これじゃせっかく綺麗な窓からの景色はあんまり楽しめないんじゃない？ と一瞬思ったけれど、今回のメインはお茶じゃなくてお見合いだ。

ならこっという席の方がいいものかもねと思い直す。

こちらに背を向けて、既に誰か座っている。

マナー通り5分前に来たけど、どうやら相手はもう少し早く来ていたようだ。

「お連れ様がお見えです」

「ああ、ありがとう」

さして大きくないのに随分響く声だな、と思った。通る、という感じが近い。低くて耳に残る。

座っていた男性が立ち上がり、最初に感じたのは、背が高い、ということだった。がっしりとした広い背中に、メタボな社長の印象はいつぺんに吹き飛ぶ。

そしてゆっくりと振り返った姿に、思わず呼吸が止まった。

大丈夫、会ったら絶対に断ろうなんて思わないから！

社長の言葉がフラッシュバックする。

だってだって、そこにいたのは多分日本中の誰もが知っている、そのくらい有名な。

俳優、榊浩司だったのだ。

榊浩司と言えば、舞台出身でテレビドラマや映画で大活躍、アカデミー主演男優賞も受賞しているはず。

ついこないだまで放送されていた検事のドラマ、めっちゃ見てたよ！

そ、そんな大スターが、なんでこんなところにいるの？

「どうも、初めまして」

「あっ！ はい、初めまして」

声を掛けられて、ようやく我に返る。米つきバツタのように慌てて頭を下げた。

今私ものすつごく間抜けな顔をしていたと思う。

いや、待て、落ち着け私。ただ似ているだけかもしれない。というか、別人でしょ。

そんな簡単に大スターに会えるわけがないじゃないか。しかもウチの社長のご紹介のお見合いなんかで。

「今日はよろしくお願いします」

「はっ、いえっ、こちらこそっ」

席に着いて改めて目の前の男性を見る。なるべく凝視しないように、顎のあたりに視線を合わせて、こっそりと。

やっぱり、見れば見るほどテレビや映画で見たことのある榊浩司その人だ。

顔かたちは一見すつきりと整っているのだけれど、そこに感じるのは美しさや甘さではなくもつと激しくって強いもの、例えるならば剛毅であるとか、武骨と呼ぶのがしっくりくると思う。

視線を引き寄せられてしまうのは、やっぱり目だ。鋭さを宿した瞳がただでさえ強烈な印象に、さらなる力を加えている。

だけど目尻と涙袋に少しだけ寄る皺は、まるで元々は野性的で荒削りだったものが年月と経験という名の研磨を経たことで穏やかさを纏わせているように見えて。

……まあ要するに、とびつきりいい男ってことなんだけど。

ただ精悍さを漂わせたいいい男ってだけじゃなくって、渋い大人の色

気がむんむんです。

普通に座ってるだけなのにものすつごく絵になる。

よく芸能人にはオーラがあるとかいうけど、確かに、ただのイケメンじゃ絶対に醸し出せないものを全身から発している。

多分、本物。

ていうかこれが偽物とか良く似ている人だったら本物はどんだけすごいんだって話になっちゃう！

私が座って一呼吸置いたのを見計らったようにスタッフがメニューを持って現れた。

「お話の前に何か頼みましょうか」

「あ、はいっ。じゃあ私は、シングルエステイトアッサムで」

とりあえずメニューを開いて、すぐ目に付いた紅茶の名前を口にしました。彼はアメリカンコーヒーをオーダー。

注文が済むと一転、沈黙が通りすぎる。遠くにピアノの音が聞こえるけれど、今はとてもとても楽しめるような状況じゃない。

4 とりあえずお茶を

「改めまして、榊浩一と申します」

口火を切ったのは、彼の方だった。

あれ？ こういち？ と一瞬思ったけれど、深く考える前に返事をしなきゃと気が焦ってしまった。

「あ、はい、私は坂本幸子と申します。このたびは小田桐からご紹介いただきました」

動揺を隠そうとすると、ビジネスライクな言葉しか出てこない。再び軽く頭を下げる私を、榊さんは軽く手を振って止める。

「いやいや、そういう堅苦しいのは無しにしましょう。そのために二人きりで会っている訳ですから」

「は、はい、わかりました」

顔を上げて目を合わせると榊さんはふつと目を細めた。

ひよええ、笑顔やばい！ 見とれないように咄嗟に視線を逸らすのが精一杯だぜ。

さてさて、これはお見合いだ。平常心、平常心。

「何か、僕に関して小田桐からは聞いていましたか？」

「いえ、何も」

後輩とは聞いていたけれど、それ以外は年齢すらちゃんと教えても

らってない。

「すみません、それに関してはこちらからお願いしたことなんですよ」

「と言いますと」

「先入観持たれると、困るので」

「先入観、ですか」

まあ確かに最初に相手が俳優榊浩司だって知っていたらもう少し気合い入れてきたよね。最低限美容室でセットくらいはしたな、うん。

……というか、断ったかも。恐れ多くて。

大スターなんて、遠くから見ていくくらいでいいよ。こんな至近距離に存在されたら心臓に悪すぎるわ。

いやその前に信じなかったな。今も信じられないし。

ふと総務課長の笑っていなかった目が頭を過った。確かに事情、ありすぎる。

多分社長の考えていたお見合い相手の第一候補は鈴木さんだったんだろう。

ただとお見合い相手が榊浩司だったら、乗り換えられたっておかしくない。彼氏なら気が気じゃないよね。

会わせたくなかったら、社長を納得させるしかない。それで今まで隠してきた付き合いのことをばらさざるを得なかったんだろう。そこできつと色々突っ込まれて、結婚するところまで白状したと。あの社長の様子じゃ相当根掘り葉掘り聞いているだろうし。

今のところ社内に噂は広がっていないけれど、本当は、言いたくなかっただろうな。

鈴木さんは簡単に男を乗り換えたりするような子じゃないとは思うけど、不安だよな。可愛い子を彼女にした男は苦勞するなあ。まあ、幸せな悩みだ。もげてしまえ。

あまりにも見つめたら失礼だろうと視線を顎からさらに落として、喉仏あたりを眺めながら、あの奇妙な三者面談を思い出していたら榊さんが不思議そうに尋ねてきた。

「自惚れていると思われるかもしれませんが……坂本さんは僕をご存知ですか？」

へ？ 何当たり前のことを訊くんだ？

「はい、存じ上げております」

「何か疑問、お持ちになりませんでしたか？」

「いえ、特に」

と言った後にそういえば名前が違ったなと思に至る。いやそれだけじゃなくて質問疑問はてんこ盛りですよ。社長とはどういう先輩後輩なのかとか、そもそもなんでお見合いなんぞしてるのかとか。

でも一旦無いつて言った後やっぱりありますってのもなんだか間が抜けている感じがして、黙って涼しい顔を作ってみる。あれこれ訊いてミィハーっばく思われるのもなんか嫌だし、というのはいい訳で、上手く口が回らないだけ。

いつもこうだ。頭の中ではぐるぐるいろんなことを考えているのに、言葉に出来ない。

まあいい、こちらが何も知らない以上、主導権は最初から向こうにある。

「お待たせしました」

そうこうしているうちに、注文していた品物がやってきた。

ポットに入った紅茶を茶漉しに通して注ぐと、ふんわりといい香りが漂う。

なみなみには注がないで、7分目まででストップ。

アッサムはストレートで飲むにはちよつと濃い。だけどその濃い中に甘みがあるから、ミルクティーに合うんだよね。

思わず口元が緩む。紅茶は好きだけど、普段はもっぱらティーバッグだ。1杯1000円超えるお茶なんて、そう度々は楽しめないもの。

しかもこの茶器はウエッジウッド。自分じゃ絶対に手の届かない美しいカップは、見ているだけでうきうきしてくる。

ところが意識を紅茶へと集中させていた私の耳に、信じられない言葉が飛び込んできた。

「結婚を前提にお付き合いしませんか？」

今日初めて顔を合わせた彼は、嬉々として紅茶にミルクを注ぐ私に突然そう言った。

私はミルク後入れ派なのだ。

とりあえずミルクを適量紅茶に注ぎ、スプーンでよくかき混ぜたあと、一口飲む。うん、美味しい。味覚は正常と。

では聴覚はどうなのだろう。いまひとつ自信がないので問い返してみる。

「今なんとおっしゃいました？」

「結婚を前提にお付き合いしませんか、と」

微笑んでいる榊さんの前で思いつきり顔を顰めそうになるのを必死で堪えて私も笑みを顔に貼りつける。

ちよつと待て。

まだお互い名前教え合っただけで自己紹介もまともにしておりませんが。

私の家族構成とか仕事を何しているとかは仲介人でもあるウチの会社の社長から聞いているのかもしれないけどさ。それより何よりあなたと私はついさっき、ほんの十数分前に出会ったばかりですよ。いや待て待て待て、この十数分で何かあった？

初対面の男性にお見合いとはいえ速攻で結婚とか意識させちゃうミラクルな難度の技なんて繰り出したりしたっけ？

こめかみに指をあてて考えてみる。

……ぜんっぜん思いつかない！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0031z/>

お嫁さまの条件

2011年12月5日09時52分発行